

化学教育 徒然草

1人1台の端末がある 理科の授業

YAMAGUCHI Akihiro

山口晃弘

東京都品川区立八潮学園 校長
全国中学校理科教育研究会 会長



巻頭言

この原稿を書いている2月現在、新型コロナ・ウイルスによる影響は好転したとは言い難い状況が続いている。「感染力が増した変異種が広まっている」「重症者が1,000人を越えた」など、よくない情報は後を絶たない。諸外国の中には再び外出禁止になっているところもあり、我が国が同じ状況にならないことを願うばかりである。

小・中学校で授業は再開されている。児童生徒はもちろん教師もマスクは常用で、教室では「冷たくても手洗い、寒くても換気」と呼びかけている。コロナ禍の収束は見通せないのは確かだが、しかし立ち止まって「学び」を止めるわけにはいかない。

私の学校でも、不慣れで戸惑いがちだったオンライン授業だったが「やらざるを得ない」状況に追い込まれると、いつの間にか「YouTube」「Zoom」「オンデマンド」などが日常会話で飛び交って、その事態を乗り越えている。すでに「学級閉鎖で生徒が登校できなくても何とかできる」という手応えが実感としてある。それどころか、若い教師が中心となり自主勉強会を立ち上げ「オンラインでの双方向性をふだんの授業に生かしたい」「ハイブリッド型授業や反転学習をしたい」などという前向きな発想さえあり、熱気を感じる。まさに、コロナ対応の取り組みが常態化されることが前提となって「学校の新しい生活様式」が定着しようとしている。自治体、学校、教職員、教育関係の機関などの英知や工夫、努力などによって、様々な学習の工夫がなされようとしている現状がある。

今後、令和3年度には大部分の学校で児童生徒の手元に1人1台の端末が配付される。「GIGAスクール構想」は、これまでも自治体が主体となって前倒しに進められているが、新型コロナ・ウイルスの感染拡大が追い風になって、一層実施が早まっている。政府が唱える「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境」が自然に根付いて広まるのはそう遠くない将来である。

1人1台の端末が児童生徒の手元にある理科の授業。これが、これからの学校の風景になる。すでに教師も児童生徒も新たな学習の可能性に気付き始めている。今後の理科の授業の実践の方向性を期待や希望をもって見守り、応援したい。

[連絡先]

140-0003 東京都品川区八潮5丁目11-1 (勤務先)